

あなたの生活に文学を



阿部 公彦

文学には冠婚葬祭の働きがあります。不幸があれば悼み、福があれば祝う。年が変れば振り返る。おそろく重大な事件や時代の切れ目ごとに、私たちは特別で「ありがたい」言葉を欲するのでしょうか。

古谷田奈月「神前酔狂宴」

舞台となるのは、明治神

結婚式裏の現実描く

前向き主人公に爽快感

今月の文芸誌も、平成の終わりを特集する紙面の多いこと、とりわけ「文芸再起動」との見出しを立てた「文芸」(夏号)は冠婚葬祭色が強いようです。

目玉は古谷田奈月さんの長編「神前酔狂宴」。神社付設の披露宴会場で働く人々を描く、まさに冠婚葬祭小説です。葬儀や婚礼を描く小説の例に漏れず、斜めの視線から式を見る。新郎新婦は「金を生み出す神」。

描かれるのは裏の現実です。しかし、軽快な語り口か

アルバイトとして働き始めた浜野は、当初、軍神にまつわる伝説や、神社ごとの文化、社員気質の違いなどに違和感を覚えるものの、徐々に職場になじみ、むしろ積極的に働きがいを見出すようになりま。

はより厳粛な作品です。描かれるのは鎮魂のための行脚。主人公は日本各地の水辺の災害跡を巡り、静かなまなざしで現場を見つめつつ、土地の神話へと想像をふくらませます。神秘的なものも垣間見える。

しかし、浜野は伝統的な国家神道や結婚制度に満足するわけではない。神社政治のメカニズムの扱いにも慣れた彼が、ライバル関係

しかし、作品の芯を成すのは、天よりも地のイメーシ。とくに泥濘(ぬかるみ)です。冒頭近く、阿武隈川の河口付近の砂州で「砂地だとばかり思ったところに足を乗せたたん、ズブズブとはまりかけた」という

るほどの苦しみをへて脱糞も魂を鎮める呼吸音が聞こえる。描写は圧巻です。「硬い土に植えてある樹木の幹を引っ張り上げて大量の土がへばりついた根っこが出てくるように、最初は手首大の塊が出てきて、彼は大きく息を吐いた」

佐伯さんの作品にはいつ

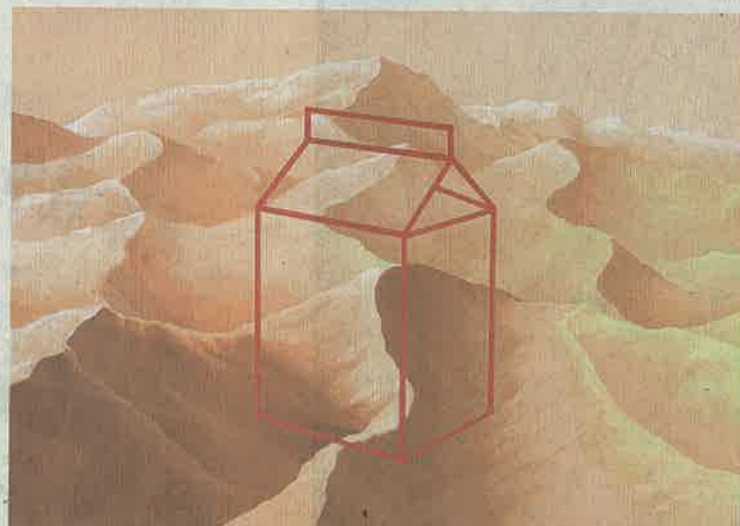
▽師への思い

「群像」(5月号)では笹野頼子さんの連作「会いに行つて」の連載が始まりました。冒頭に「これから

私の師匠説を書く」とのあやしい小見出し。笹野さんが勝手に師匠と仰ぐ藤枝静男は独特な作風で知られ、志賀直哉的な私小説の主流からは外れた人でした。本作も日常生活やデビュー時の記憶、病との苦闘などを柱にしつつ、自身を引き立ててくれた藤枝静男について語るうちに声があがらず、直の「呼びかけ」が割りこむというぐしゃぐしゃした構造です。

▽空虚な呪詛

文学界新人賞受賞作、奥野紗世子さん「逃げ水は街の血潮」(「文学界」5月号)は地下アイドルの荒廃した日常風景を一人称で語ります。「露出が多けりやセックスオツケー理論を応用すれば尻ポケットから長財布が見えてたら取ってもいいのだ」といった鋭利で



絵・片山 高志

逸脱だらけの奇妙な作品にも見えますが、制御をやって叫びのように発せられる声にはなかなかインパクトがあります。

たまたま「群像」には保坂和志さんと郡司ベギオ幸夫さんの対談「芸術を憧れる哲学」も。話題になった郡司さんの「天然知能」(講談社選書メチエ)を、保坂さんは「自分のやっていることが完全な自分の能動性ではない」とわかっている人たちが描かれていると評します。文学作品の「声」も、しばしば「自分の能動

迷走する主人公を通して「自分の能動性」の外にある叫びをとらえるのか。それとも箴言(しんげん)めいた言葉の毒で世界をやっつけるのか。この先を見た

文化

▽鎮魂の行脚

佐伯一麦さんの「山海記(せんがいき)」(講談社)

本館は2009年に百貨

の建物には、百貨店として

KYO」がオープンした。日生劇場(東京)などの代

店としては初めて国の重要

は日本で初めて冷愛芳が

ら設計を手掛けたという。

運ぶ場所として意識しながら

6月4・9日には大